

学校教育実践学研究, 2018, 第24巻, 131 - 148頁

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告 XI

朝倉 淳・深澤 清治・松浦 武人・松宮 奈賀子・泉 沙希*・城戸 ナツミ*・
近藤 秀樹*・塩田 佐恵*・高木 勝海*・中山 貴司*・畠山 絢*・尾藤 郁哉*・
福田 麟太郎*・古川 恵理*・宗本 千鶴*・吉崎 優葵*

(2017年12月21日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students
in Elementary/Secondary Schools in the United States (XI)

Atsushi ASAKURA, Seiji FUKAZAWA, Taketo MATSUURA, Nagako MATSUMIYA, Saki IZUMI, Natsumi KIDO,
Hideki KONDO, Sae SHIOTA, Katsumi TAKAKI, Takashi NAKAYAMA, Aya HATAKEYAMA, Fumiya BITO,
Rintaro FUKUDA, Eri FURUKAWA, Chizu MUNEMOTO and Yuki YOSHIZAKI

Abstract. This paper reports on the 11th overseas teaching practicum in the U.S. 12 students joined this year's program and they observed and conducted lessons in English in three local public schools in North Carolina after careful and repeated preparation sessions in Japan. Many of them did lessons on crosscultural understandings and a few taught subject contents. Through the trail to convey messages in English, their foreign language, students learned the role of verbal and nonverbal language and the more universal way to explain topics to children who are unfamiliar with what re taught. And they also learned and noticed the cultural differences and simialities between the two countries. It seemed that students realized that the two countries share many things in common such as what chidren are like, teachers' attitude toward children and challenges they are facing, and people's kindness. These learning was no substitute experience for the participants and it is hoped that their experience will be passed to the next generation when they become teachers.

Key words : global education, overseas teaching practicum, crosscultural understanding

1 はじめに

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター (Hiroshima University Global Partnership School Center 以下 GPSC) は広島大学大学院教育学研究科の共通選択科目である「体験型海外教育実地研究」を通して海外教育実習を企画・実施しており、本稿は第11回目を迎えた学生派遣の研究報告である。

本年度は同研究科博士課程前期の大学院生 12名が参加し、アメリカの小中学校での授業開発、授業発表に取り組んだ。下記の概要に詳述するように、今年プログラムも例年通り4～8月の事前教材研究に始まり、9月15日～25日の現地での教育実地研究 (米国ノースカロライナ州グリーンビル市内にある3つの公立小・中学校での授業

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

観察及び教育実習)、広島大学大学院教育学研究科との協定校であるイーストカロライナ大学での大学院授業への参加と受講生との交流、州都ローリー市内のチャーター・スクール(州から認可された地域団体などが自主運営する公立初等中学校)であるイクスプローリス小学校・中学校での授業見学、校長・教員・生徒ガイドとの交流などを行った。またローリーの博物館を回っての教材収集、ワシントン DC での他文化理解のためのフィールド調査、そして帰国後の事後研究による教材完成と最終レポートの作成、そして12月20日には全員による研究成果発表会を実施した。

また、これに先だって7月8日には「グローバル時代に求められる教員養成」と題して第13回学校間交流国際フォーラムを開催し、そのために本研修の実習校であるウォールコート小学校とエッペス中学校から2名の先生を招聘し、これまでの体験型実習の与えたインパクトについてプレゼンをしてもらうと同時に、翌7月9日には体験型のための授業研究ワークショップを行い、英語による学習指導案と教材の検討を行った。

以下では、今年度の体験型の概要、参加者による授業振り返りと海外体験を通じた自己変容、共同研究者による授業の報告および最終的なプログラム評価について紹介していく。

2 2017年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2017年度、本授業科目の実施状況(全体日程)は以下のとおりであった。

- 4月 6日(木) 本授業の概要と計画説明
- 4月 27日(木) 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5月 23日(火) 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月 7日(水) 学習指導案の検討(1)
- 6月 13日(火) 学習指導案の検討(2)
- 6月 28日(水) 学習指導案(英語版)の検討(1)
- 7月 3日(月) 学習指導案(英語版)の検討(2)
- 7月 8日(土) 第13回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月 9日(日) 2017年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 8月 7日(月) 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 9月 4日(月) 準備状況の確認、教材集・報告書の作成・報告会についての確

認、渡航に関する書類提出

- 9月 11日(月) 渡航前最終打合せ
- 9月 15日(金)～9月 25日(月) 米国における「体験型海外教育実地研究」
- 12月 20日(水) 「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

- 9月 15日(金) 広島出発、成田泊
- 9月 16日(土) 成田出発、米国ノースカロライナ州ローリー到着
- 9月 17日(日) グリーンビル到着、授業準備および授業打合せ
- 9月 18日(月) グリーンビル現地学校訪問(観察)、イーストカロライナ大学教材開発センター見学、同大学学生との交流
- 9月 19日(火) グリーンビル現地学校訪問(授業実施)
- 9月 20日(水) イーストカロライナ大学の授業参加、ローリーへ移動
- 9月 21日(木) イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9月 22日(金) ローリー市内(博物館等)研修、ワシントンへ移動
- 9月 23日(土) ワシントン(スミソニアン博物館等)研修
- 9月 24日(日) ワシントン出発、機内泊
- 9月 25日(月) 広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には12名の大学院生が参加した。

参加院生の現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。

【エルムハースト小学校(K-5)】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生

参加者：尾藤郁哉・古川恵理・近藤秀樹・城戸ナツミ

引率者：朝倉淳

【ウォールコート小学校(K-5)】

実施校担当者：シンディー・ワトソン先生

参加者：泉沙希・福田麟太郎・中山貴司・吉崎優葵

引率者：松浦武人

【C.M. エッペス中学校(6-8)】

実施校担当者：アリソン・キリー先生

参加者：宗本千鶴・畠山絢・塩田佐恵・高木勝海
 引率者：深澤清治

参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

3 参加者の報告

参加者(12名)は、開発・実践した授業に関する「ねらい」、「概要」、「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。

次頁以降にこれらの報告を掲載する。

4 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度授業の実施状況

	学年	教科等名(上段) テーマ・題材等(下段)
A	3	異文化理解 Let's find the goodness of "Fall" !
B	3	異文化理解 Let's enjoy Rakugo !
C	4	異文化理解 Let's learn about "oshogatsu" and enjoy "fukuwarai"
D	4	異文化理解 Let's tell your future dream to Japanese Children !
E	4	異文化理解 Let's play paper sumo !
F	5	体育 Let's dance "Soran" !
G	5	異文化理解 Let's make an original "furin" !
H	5	理科 How interesting dragonflies are !
I	7	異文化理解 Let's create your own Mononoke !
J	7	異文化理解 Let's create an original 4-koma manga !
K	8	異文化理解 Let's create the "History Karuta"
L	8	異文化体験 Let's introduce our school !

※「教科等名」「テーマ・題材等」は、参加者(授業者)が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置付くものである。

参加大学院生は、日本での事前学習(米国から招聘した関係校教員とのワークショップを含む)により、テーマ・題材等の設定から英文学習指導案の作成までを行った。また、渡航前に教材・教具の準備、資料の作成などを行った。渡航の後は、授業実施までの二日間で、授業実施校の教員と打ち合わせを行い、授業過程や教室環境などについて一応の確認をしている。

平成 29(2017)年、ノースカロライナ州グリーンビル市の3校において、参加大学院生12名が実施した授業は左の表のとおりである。教科等やテーマ・題材等については、基本的には参加者自身が考え、設定したものである。実施された授業は、「テーマ・題材等」から、およそ次のように大別される。

ア	主に日本の伝統や文化、特色ある事象などを紹介する授業(B, C, E, F, G)
イ	主に特定のテーマについて、内容を深めたり日米における共通点や相違点を考えたりする授業(A, H, I, J, K)
ウ	主に日米の児童生徒がそれぞれの生活や想いを交流する授業(D, L)

授業環境には様々な難しい状況もあったが、すべての授業は、計画していたことが、ある程度あるいは一応できた形で終わることができた。これは、参加大学院生の努力の結果であるとともに当該校の児童生徒、教職員の協力や支援のお陰でもある。

その一方で、参加大学院生は、授業実施後、自らの授業について授業構成上の課題や実践上の課題など多くの課題を発見している。発問の吟味、説明の工夫、授業過程の単純化、時間配分の見直し、個別指導の方法など、ほとんどは日本における授業研究においても課題となる点であり、授業づくりの基本は日米でともに重要であることが確認された。本授業科目の趣旨でもあり、本授業科目にとっては、課題というよりは成果の一つといえることができる。

(2) 参加大学院生の変容

渡米中に随時実施したミーティングの内容や参加大学院生(現職教員3名を含む)が自ら記述した「自己の変容」などをもとに、授業科目としての「体験型海外教育実地研究」を通して、とりわけ米国での授業実践を通して、参加大学院生の何がどのように変容したかを考察する。

第3学年 異文化理解 “Let’s find the goodness of ‘Fall’!”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 城戸 ナツミ

1 ねらい

日本の秋のよさについて知るとともに、身の回り（アメリカ，ノースカロライナ州）の秋にも着目しそのよさを再認識することを通して，それらの共通性を踏まえて双方の秋の文化や様子を理解する。

2 概要

- (1) 日本の秋のよさについて，風景 (landscape)，食文化 (food)，行事 (event) の3つの観点から紹介する。
- (2) 児童の身の回りの秋について同様の観点で紹介してもらい，そのよさを再認識させる。
- (3) 日本とアメリカの秋の共通点や相違点を探し，それぞれの良さに対する理解を深める。
- (4) 日本・アメリカ双方で使用できるカレンダーのイラストを描くことで両方の秋のよさを表現するとともに，異文化理解を図る。

3 成果と課題

本授業の成果は以下の二点である。一点目は，アメリカの秋について児童から紹介してもらう活動を設定することで，日本の文化を知るだけでなく，児童の身の回りの文化への肯定的な再認識を促すことができた。一方的に文化を紹介する興味を持つ異文化理解ではなく，自らの文化の良さを踏まえた異文化理解を促すことができた。二点目は，日本・アメリカ双方で使用できるカレンダーのイラストを描くという表現活動を設定することで，日本・アメリカ双方の秋の良さやその共通性への理解を深めることができた。授業者が日本の秋を，児童がアメリカの秋を紹介することによるその理解に加えイラストに表現することで，それらのよさや共通点を児童それぞれが楽しみながら整理することを促すことができた。

本授業の課題は以下の二点である。一点目は，イラストを描く活動に十分に時間を充てることを意識しすぎたあまり，日本の秋についての紹介が少なくなってしまうことである。想定よりも児童は日本とアメリカの秋に多くの共通性を見出していた。日本の秋の風景，食，出来事だけではなく気候変化や生物・人の活動の変化等，他の観点も加え紹介することで，より共通性を意識しつつ日本文化について理解することができたと考えられる。二点目は，活動が活発になった後の終結場面を整理できなかったことである。活動を楽しむことと規律を意識することのバランスがとれず，終結場面では現地教員による補助が増えてしまった。全体での交流等を取り入れた終結場面を設定するとともに，学校で用いていた規律を意識するための声かけなどを活用しながら整理する必要があると考えられる。



児童が作成したイラスト

【自己の変容】

今回の実地研究を通して，授業に対する授業者・学習者双方の意識が重要であるという認識が深まった。言語の壁のある学習者に対する授業実践を体験することで，授業構成においては授業者の一方的な思いや考えからではなく，常に‘学習者のため’を意識すること，さらに授業実践においては学習者と一つ一つの活動や内容について認識を共有しながら行うことの大切さを改めて感じた。「伝わただろう」「分かっただろう」では学習者が置いてきぼりの一方的な授業となってしまふ。今後は，表面的で一方的な児童生徒理解ではなく，相互の共通認識のもとで授業を行うことを常に意識したい。

第3学年 異文化理解 “Let’s enjoy Rakugo !”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 近藤 秀樹

1 ねらい

日本とアメリカの間には、様々な文化の違いがあるが、ここには「笑い」の文化の違いも存在するのではないかと考える。また、「笑い」は、老若男女問わず、様々な人々が共通に考えることのできるテーマであり、子どもたちにとっては特に身近なものである。そこで、日本の伝統芸能である「落語」を紹介し、実際に子どもたちに実演して楽しんでもらうことで、「笑い」の文化の相互理解を通して、異文化理解の態度の育成を目指す。

2 概要

- (1) 導入部では、自己紹介および日本（授業者の出身地）の紹介を行った。また、「笑い」に関心があることを示し、アメリカンジョークを2つ実演した。
- (2) 展開1では、日本の落語「猫の皿」を英語でパワーポイントを併用しながら実演した。
- (3) 展開2では、子どもたちに短い英語落語の SCRIPT を配布し、グループで練習した後、クラス全体の前で実演させた。
- (4) 展開3では、アメリカンジョークの「オチ」と、落語の「オチ」を考えさせることから始め、日本とアメリカの「笑い」の違いを考えさせた。
- (5) 終結部では、本時のまとめとして、日本とアメリカの文化の一つとしての「笑い」には様々な共通点と相違点があることを示し、文化の共通点と相違点を考えることは異文化理解の第一歩であるということを示した。

3 成果と課題

本授業実践の成果は大きく2つあると考える。1つは、日本の伝統芸能である落語をアメリカの子どもたちに楽しんでもらえたことである。まず授業者が落語を披露したが、スライドショーをパワーポイントに映しながら演じたため、理解することがより容易になったと考えられる。また、アクティビティのパートでは、子どもたちに実際に落語の SCRIPT を渡して、実際に演じさせたことで、体験的に落語に触れることができたこともよかったと考えられる。

そして2つ目は、異文化理解の態度を、子どもたちの身近なものである「笑い」を通して考えさせることができたことである。異文化を理解するためには、その第一歩として、自らの持つ文化との共通点、相違点を考えることが必要であろう。これに関して、文化の一翼を担いながらも、子どもたちにとって身近で考えやすい「笑い」をテーマに扱ったことは、有意義なものであったと考えられる。

本実践の課題は、落語とアメリカンジョークの共通点と相違点を考えるパートが、ただ子どもたちの意見を集約するだけにとどまってしまう、議論まで発展しなかったことである。授業者の英語力が不足していたため、繰り返し発問を行うことができなかったことが大きな原因であると考えられる。

【自己の変容】

今回の授業実践で強く感じたことは、非言語コミュニケーションの重要性である。子どもたちは授業者の拙い英語にもしっかりと聞いてくれた。これは、何とか伝えようとハンドジェスチャーや擬音語など、非言語の部分で伝えようとしたことがよかったのではないかと考えられる。

また、改めて、授業は教師と子どもの双方によって作り上げられるものであると再認識した。授業を活発で発展的なものにしていくためには、子どもの思考をベースにして、教師が発問などを通してより思考を促したり、視点を提示したりすることが大切だということ改めて感じた。

第3学年 異文化理解 “Let’s learn about ‘oshogatsu’ and enjoy ‘fukuwarai’!”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 尾藤 郁哉

1 ねらい

日本の伝統文化の1つに「お正月」がある。日本人は一年の節目をととても大切にし、これからの一年間に向けて様々な願いが込められた慣習が多数存在する。その中でも、今回アクティビティとして取り上げるのは、日本の伝統的な正月遊び「福笑い」である。日本では「笑う門には福来る」という言葉もあるように、年のはじまりにたくさん笑うことによって一年の幸福を呼び込もうとする。そのことを「福笑い」を通して体験してもらいたい。本授業では、異文化理解の一助として①日本人が新年をどう過ごしているかを学ぶこと、②日本の伝統的な遊び「福笑い」を楽しんでもらい、それを通して日本の文化に触れてもらうことの2点をねらいとした。

2 概要

- (1) 自己紹介で自分の趣味である旅行について話し、その醍醐味は、様々な国の文化を知り、体験できることであるとした。そこから、文化を知ることには自分の視野を広げ、成長するきっかけとなるということを伝えた後、今日は日本の文化を紹介しにきたと展開した。
- (2) 「お正月」の説明をした。アメリカの新年と比較をしながら、「お正月」の慣習をいくつかピックアップし、写真をたくさん用いながら紹介した。
- (3) 日本の伝統的な正月遊びとして、「福笑い」を実際に体験してもらった。日本で作成したものを持っていく、グループに分かれて遊んでもらった。
- (4) 日本人は新年にたくさん笑うことで幸福を呼び込もうとする慣習があることを伝え、本時のまとめとしてねらいに挙げた2点を振り返った。

3 成果と課題

まず成果についてである。本授業では、日本の「お正月」について知ってもらうことと、「福笑い」を楽しんでもらうことの2点を目標としていた。「福笑い」の活動中は子どもたちのたくさんの笑顔が見られた。ルールもシンプルなため、どの子どもも楽しめていたことは成果と言えるだろう。使用した顔の素材の中に子どもたちになじみのあるものを加えたことが効果的に働いたのだと思う。

課題は、授業の前半で説明調な授業になってしまったことである。その原因は、緊張、英語への自信のなさだろう。予想していない質問がでることや、またそれに切り返し発問をすることへの不安がそうさせてしまったのだと思う。

【自己の変容】

授業をして出た課題は、特別アメリカだから生じたものかということ、そうではないことに気づいた。授業後の反省会で「英語ができる＝コミュニケーションができる」ではない、その逆もまたしかり。という先生の言葉を聞いて、自分は言語の壁のせいにして思考を停止していたと反省した。これは日本で授業をする際もいえることである。あらかじめ子どもの状況をもっと具体的に想定することだけでなく、授業内で教師が予想していない反応だった時どうするかまで考えるべきだと学んだ。自分がこれから教師になるうえでも、教材研究に重点を置きすぎるのではなく、生徒にとってそれをどう扱えば有用なものになるのかを考えていきたいと思った。

第4学年 異文化理解 “Let’s tell your future dream to Japanese Children !”

教育学研究科 教職開発専攻 教育実践開発コース 泉 沙希

1 ねらい

日本では20歳で成人になる。10歳は20歳の半分であり、将来について考えるいい機会であろう。ゆえに小学4年生において、①自身の将来の夢について考えること、②アメリカと日本の子どもの将来の夢を比較することによって、共通点と相違点を考えること、の2点をねらいとした。また、日本の小学4年生が将来の夢を書いた作品を、アメリカの小学4年生に提示・贈呈し、アメリカの小学4年生にも将来の夢を書いた作品をつくってもらい日本に持ち帰るという日米交流型とした。

2 概要

- (1) パワーポイントで写真を提示し、日本の成人式について説明した。
- (2) 紙を配布し、将来の夢について考えて記入する活動をした。
- (3) パワーポイントを用いて、日本の小学4年生が将来の夢について書いた作品を提示し、クイズ形式で日本の子どもの将来の夢を紹介した。
- (4) 風船型の紙に将来の夢を書く活動をした。将来の夢に関する絵も描かせ、日本の小学生に伝えることを意識させた。
- (5) 一人ずつ自分の将来の夢について発表し、青い台紙に風船型の紙を張り付けていった。その後、日本の子どもとアメリカの子どもの将来の夢を比較し、似ているか違うか考えた。

3 成果と課題

本授業の成果として、アメリカの子どもが自身の将来の夢について考えることができたこと、日本の子どもの将来の夢について知ることができたことが挙げられる。成果物から日米の比較をしてみると、日本の子どもは一つの職業だけ書いていたのに対し、アメリカの子どもは全く異なる職業を複数書いている子もいたことが、違いとして挙げられる。また、絵を用いてクイズ形式で子どもの将来の夢を紹介できたことから、視覚支援の有効性が示唆された。

課題は、日米の子どもの将来の夢を比較する場面で、考えるための手立てが不足していたことである。子どもたちは何を考えどのように答えたらよいかわからない様子であった。授業者自身も、子どもが発表した内容を理解することができず、深めることができなかった。子どもが深く考えるような発問では、子どもが考えをまとめたり、授業者が子どもの考えを理解したりするために、ワークシート等の手立てが必要だと考えられる。

【自己の変容】

Wahl-Coates 小学校の先生に「教師をしていてよかったこと・大変なこと」を質問した際、「大変なことは毎日ある。でも明日がある。」といった内容の返答をいただいた。今日うまくいなくても、明日やり方を変えてやってみるということを日々先生方は行っているのだとわかった。失敗への不安を感じるが多かったが、うまくいかないことがあっても次があるという考え方に触れることで、継続した生活の中でよりよくするために挑戦し続けていけばいいのだという考え方へと変化した。

また、コミュニケーション能力のとらえ方も変化した。コミュニケーション能力というのは言語化できるかどうかという点だけではなく、伝えようとする気持ちやそれに伴った行動、理解しようとする姿勢、そしてうまくいかなかった時にどう対処するかという点も含まれると考えるようになった。英語力がないからうまく伝えられない、とコミュニケーションをとることから逃げてしまっていた部分があったが、伝えようとアクションを起こせば、相手は理解しようとしてくれることがわかった。

第4学年 異文化理解 “Let’s play paper sumo !”

教育学研究科 学習開発学専攻 カリキュラム開発専修 福田 麟太郎

1 ねらい

日本でよく行われている室内遊びである紙相撲で遊ぶことを通して、日本の室内遊びを楽しむこと。また、この遊びを学級の室内遊びの一つとして遊んでもらえるものにする。

2 概要

- (1)日本の伝統的なスポーツである、相撲の説明をする。
- (2)折り紙で、力士を作る。
- (3)紙相撲のルールを確認した後に、厚紙で作った土俵を使い、自作の力士で紙相撲をして遊ぶ。
- (4)授業で使った土俵と力士はクラスのものとして保存し今後もそれを遊びに使っていいことを伝える。

3 成果と課題

成果

- ・紙相撲のルールを理解してもらうことができ、子ども達が実際に楽しく遊んでくれたこと。紙相撲のルールを理解する前に大相撲の映像を流すことで、転んだり、枠の外に出たりしたら負けというルールを理解させることができ、紙相撲のルールも一度の説明で子どもに伝わったのだろう。
- ・子どもの発言を聴き取りながら、授業を展開したり、子どもの援助要請に対して英語でコミュニケーションをとったりしながら支援ができたため、全員が自分の力士をつくれて遊ぶことまでできたこと。それにより、短時間で自分が子どもとたくさんコミュニケーションをとれたこと。

課題

- ・力士の作成に時間をかなり消費してしまい担任の先生やそのほかの先生方に作業を手伝ってもらわなければいけなかったこと。それでも想定していた活動全てを消費することができなかったこと。
- ・力士の作り方を子どもに落とし込むことができなかったため、子どもが自力で力士を作って遊ぶようになっていないこと。これでは、私がいらないこれからの学校生活において、紙相撲で遊ぶことができず生活の一部にならないこと。

【自己の変容】

授業を作る際に、児童が楽しいと思ってもらえる授業を作ることを考えて、日本の遊びを題材に扱った。扱う力士は、折り紙の力士か厚紙を二つ折りにした力士にするかで試行錯誤してみた。折り紙の力士は多少雑な完成形でも安定感があって折り紙で作ることにした。その際、子ども達が初めて折り紙を体験することを意識して、言葉と写真で示しながら力士の折り方を説明するようにしていた。しかし、実際の授業をすると、おるときのおりが甘いといった、想定していた以上に困難さが存在していた。このことから児童が今まで体験していないことをわかりやすく丁寧に教えることの難しさを感じた。自分の英会話力を過信するのではなく、それを踏まえたうえでより質の高い授業づくりをするべきだったと感じている。

私は英会話力に自信があったので、それを駆使して授業自体がスムーズにいけば自分自身満足するだろうと思っていた。しかし、授業をしてよかった、と満足したのは、授業後、一人の児童から、来年もまた授業をしに来るのかと笑顔で聞かれたときだった。その時に英語力が本当に役に立ったのは授業の進行そのものではなく、子どもとの関わりを作るために役に立ったなと感じた。45分の授業の中で様々な反省点があったが、自分と児童がお互いにたくさん話すことができたため子ども達に楽しいと思ってもらえ、自分自身の充実感にもつながったと思っている。

第5学年 体育 “Let’s dance ‘Soran’ !”

教育学研究科 学習開発学専攻 カリキュラム開発専修 吉崎 優葵

1 ねらい

日本の小・中学校でよく踊られている、南中ソーランを踊ることで、「心を合わせて」踊る楽しさを感じることをねらいとして設定した。

2 概要

- (1) 体をほぐすこと、緊張をほぐすことを目的に、日本で行われている準備体操を、音楽に合わせて行った。音楽には日本のアニメソングを使用した。
- (2) ソーランの振り付けクイズを行った。ソーランの振り付けは、海や漁の動きがモチーフとされている。何を表した動きかを考え、踊るときの手立てとなるよう、4択クイズにして考えた。
- (3) 「どっこいしょどっこいしょ」「ソーランソーラン」のかけ声を日本語でかけながら、音に合わせて踊った。ポーズで終わることで、一体感と達成感を感じることができると考え、最後の部分を取り上げた。

3 成果と課題

本授業の成果は、音楽を聴くことや、音楽に合わせて体を動かすことは、国境をこえて楽しめるものだと感じられたことである。子どもたちは、座ったままでもまねをして踊り出す、終わろうとするとまだまだ踊りたいという表情をみせる、大きな声で日本語のかけ声を言う、という姿を見せてくれた。冒頭でソーランについての説明を行ったが、踊り始めてから空気が明るくなるように感じた。聴くだけ・見るだけではなく、自分で動いてみるという体験が、心を大きく動かすのだと感じることができた。



課題としては、音が苦手な子どもへの配慮が挙げられる。このクラスには、大きい音が苦手な子どもが一人いた。音楽が流れると耳をふさいでしまう。しかし、やりたくないわけではなく、音がないときには動いているし、耳をふさぎながらも体を揺らしている姿があった。このやりたいという気持ちを、音楽をかけることによって抑えてしまうところに、音楽の難しさを感じた。音楽が、全ての子どもにとって楽しいものではないことを忘れてはいけないと思い直すことができた。

【自己の変容】

これまで、授業を作る際、いかにおもしろく子どもが楽しめるように工夫するかということを考えていた。しかし、今回は、言語の壁が第一の問題としてあった。英語に不安があった私は、いかにシンプルに、難しい英語を使わずに伝えるか、ということを考えた。わかってほしいことは全てパワーポイントにして書き出し、子どもたちの考えは4択クイズの答えとして表してもらった。その結果、実はシンプルで伝わる・わかるということが、子どもたちに考える機会を作り、楽しい・やりたいという気持ちを引き出すことができるのだと知った。言語の壁を乗り越えるには、何を伝えたいのかははっきりさせる必然性があった。情報を選択することは、日本語で授業を行う場合の方が難しいのかもしれない。しかし、シンプルな授業が、教師にとっても、子どもにとっても大切だと考えられるようになった。

第5学年 異文化理解 “Let’s make an original ‘furin’ !”

教育学研究科 教職開発専攻 教育実践開発コース 古川 恵理

1 ねらい

本授業では、児童が日本の夏の風物詩の一つである風鈴について学び、オリジナル風鈴を作る活動の中で、なぜ日本の人々は風鈴の音色を聴くと涼しく感じるのかを考えたり、作る過程で短冊の部分に漢字を書かせたりすることによって、自国とは異なる文化に気付いたり、日本の文化に親しみをもったりすることをねらいとした。

2 概要

- (1) 自己紹介を行い、日本の位置や授業者の出身である広島的位置を伝えた後、日本には四季があること、最近まで日本は夏だったことを、スライドショーを用いて説明した。
- (2) 日本の夏の音として5つの音（海、花火、カエル、セミ、風鈴）を聞かせ、それぞれ何の音かを、クイズ形式で当てさせた。
- (3) 風鈴について、アメリカでは「ウィンドチャイム」と呼ばれていることを説明し、写真を見せながら、家のドアの前や窓の外にかけられるものであることを説明した。
- (4) 授業者が事前に作成しておいたオリジナル風鈴を見せ、音（今回は鈴の音）を聞かせた。その上で、日本人はこの音を聞くと涼しく感じることを伝え、なぜそうなのかを考えさせた。
- (5) オリジナル風鈴の作り方と短冊に書く漢字について説明し、一人一つ、オリジナル風鈴を作る活動を設定した。

3 成果と課題

本授業の成果としては、二つのことが挙げられる。一つ目は、日本の夏に聞こえる様々な音を、アメリカの子どもたちに伝えることで、自国とは異なる文化に気付かせることができたことである。日本の夏の音クイズの際、答えを聞いた子どもたちは驚いたような反応をしていた。自分たちが普段聞いている音が、日本では違うように聞こえているという発見ができたのではないかと考える。

二つ目は、風鈴や漢字を授業で扱うことで、日本の文化に親しみをもたせることができたことである。特に漢字に関しては、自分たちが使っている言語をいつもとは違った形で表せるということで、子どもたちは大変関心をもっていた。さらに、作成した風鈴をはやく家族に見せたいなどのつぶやきも聞くことができた。このことから、風鈴という日本の文化についておもしろいと思わせることができたのではないかと考えた。

一方で本授業の課題は、子どもたちが作成した風鈴をお互いに紹介し合う時間が取れなかったことである。当初計画していたよりも多くの授業時間をいただき、丁寧に子どもたちに教えることができたが、子どもの実態が分かっていなかったことや授業者の英語力が未熟であったことなどから、作る活動に多くの時間をかける結果となった。子どもたちはそれぞれ個人的には自分の風鈴を嬉しそうに見せてくれたため、全体で紹介することができれば、より有意義な授業となったのではないかと考える。

【自己の変容】

今回の経験を通して最も感じたことは、アメリカの人たちの積極性である。例えば買い物をするとき、挨拶の後に必ず一言、調子はどうか、どこから来たのかななどを聞かれた。これは、日本ではあまりないことである。形式的なやり取りだけでなく、一歩踏み込んだ質問をしてくれることで、こちらも気持ちがあぐされ、リラックスして会話することができた。相手に興味をもって質問をすることで、された方はとても嬉しい気持ちになるということ、言葉が通じにくい外国であるからこそ感じることもできたのだと考える。教師になった際には、ぜひ実践してみたいと強く思う。

第5学年 理科 “How interesting dragonflies are !”

教育学研究科 教職開発専攻 教育実践開発コース 中山 貴司

1 ねらい

トンボに関する日本文化に触れ、トンボの習性に基づいたバランストンボを作成し遊ぶことを通して、トンボに親しみや愛着をもつことができるようにする。

2 概要

(1) トンボに関する日本文化に触れる。

日本の秋の田んぼには多くのトンボが飛び交い、日本人の好む昆虫の第4位にアキアカネが選ばれていることや、戦国時代の武将が勝利の象徴として鎧兜にトンボ(勝ち虫)を飾ったり、昔から子供達が竹とんぼで遊んだりしていたことなど、トンボに関する日本文化を紹介する。

(2) オニヤンマ(約15cm)と同じ大きさのバランストンボを作成し遊ぶ。

トンボが枝の先にとまるという習性を伝えた後、その習性を表すように、トンボの頭の一転で自らの体を支える、画用紙に印刷されたバランストンボ(オニヤンマ)を各自に渡し、ハサミで切り抜かせ、指先にとまらせるなどして自由にバランスをとって遊ばせる。

(3) 3億年前のトンボ(約75cm)と同じ大きさのバランストンボの羽を動かしバランスをとって遊ぶ。

発泡スチロールでできた75cmの大きなトンボをグループごとに渡し、トンボの頭の一点でバランスがとれるよう羽を自由に動かしバランスをとって遊ばせる。その後、実物大に印刷した化石の写真を見せ、実際に3億年前のアメリカには、75cmの大きいトンボがいたことを伝える。

3 成果と課題

成果としては、アメリカの子供たちが好奇心をもち、意欲的にトンボのバランスをとる2つの活動に取り組み、私も一緒になって楽しむことができたことが挙げられる。第1の活動としては、バランスがとれるように羽の向きと大きさを調節したオニヤンマの画像を印刷した画用紙を各自に配り、ハサミで切り抜かせた。そして、子供たちに自由に立ち歩いてバランストンボをいろいろなところで試すよう促した。それによって、バランストンボを指先にのせたまま歩いたり、ペットボトルのふたや鉛筆の先、自分の鼻の上にとまらせたりするなど、自分なりの多様な方法で活動を楽しんでいた。第2の活動としては、グループごとに発泡スチロールで作った大きなトンボを渡し、羽を動かしてトンボの頭の一点でバランスをとるよう話し、チャレンジさせた。そこでは、友だちと協力しながら羽をいろいろ動かしてバランスをとろうとする姿が見られた。大きなトンボを顔の上でバランスをとったり、首の後ろにのせてバランスをとったりするなど、大きなトンボであっても一点でバランスがとれることを楽しんでいた。

このように、子供達はトンボのバランスをとる2つの活動に意欲的に取り組み、楽しむことができていた。また、トンボについて今まで以上に親しみを抱くようになったかどうか、授業の最後に“I hope you have become interested in dragonflies.”と話したとき、笑顔になったり頷いたりしてくれていた子供も多くいたので、授業のねらいもほぼ達成できたように思う。



【自己の変容】

授業を通して、個の主体性を大切にしたい学びの重要性をより強く感じるようになった。理科の不思議な現象に対する子供たちの興味・関心は、やはり万国共通であった。ただ、アメリカの子供たちは、体中いろいろなところを使ってトンボのバランスをとろうとしたり、余ったオニヤンマの画用紙を進んで欲しがったりするなど、日本人の子供以上に好奇心が強いと感じた。これは、アメリカでは日頃から、個の主体性を大切にしたい授業が行われているからだと思う。

第7学年 異文化理解 “Let’s create your own Mononoke !”

教育学研究科 教職開発専攻 塩田 佐恵

1 ねらい

私の勤務校がある広島県三次市三次町は、「稲生物怪録」という物怪にまつわる物語の舞台であり、物怪の町として知られている。物怪は、自然に対する畏敬の念や神道に通じるアニミズムの精神から生まれたものであり、日本人の心を表すものと言える。また、近年ではキャラクターとしても人気が高まっている。そこで今回の授業では物怪を紹介し、それに込められた日本人の思いを伝えたい。また、アメリカの生徒たちにもオリジナルの物怪を作ってもらい、物怪の魅力について知ってもらいたいと考え、授業を作成した。

2 概要

- (1) 導入として、物怪の説明とクイズを行った。クイズは三択から答えを選び、挙手により答える形にした。
- (2) 展開として、生徒 1 人ひとりにオリジナルの物怪を作らせた。ワークシートにイラストとその物怪の名前、説明を書かせた。机間指導を行い、アイディアに困っている生徒には個別に声を掛けた。
- (3) 終末として、グループでそれぞれ作った物怪について交流する時間をとった。また、クラス全体の前での発表を募り、1 の生徒が全体の前で発表を行った。

3 成果と課題

本授業の成果は2点ある。1点目は、日本に対する生徒の理解を深めることができたことである。日本の正確な位置についてもよく知らない生徒たちであったが、物怪の絵に興味を示し、授業に積極的に参加をしてくれた。物怪を通じて、日本のイメージを膨らませることができた様子であった。2点目は、授業の中で生徒 1 人ひとりとコミュニケーションがとれたことである。シンプルな授業展開にしたことで私自身も余裕を持って授業を行うことができ、生徒の反応に応じて授業を進めることができた。

課題として、パワーポイントの写真だけでなく、物怪の描かれた絵画や掛け軸や、動画資料など実物を提示することで更に生徒の興味・関心を高めることができたと考える。

【自己の変容】

私はこれまでアメリカの学校を訪れたことが無く、アメリカの中学生は日本の中学生とさぞかし色々な事が違うのだらうと思っていた。しかし、今回の授業や学校訪問の中で、違いよりも多くの共通点があるように感じた。そして授業をする上で最も大切なのは、日本でもアメリカでも生徒全員が参加し、思考を働かせるような課題設定と指導の工夫であることが分かった。C.M. Eppes Middle School は、家庭環境の厳しい生徒たちが多く通う中学校であったが、先生方は生徒が力をつけるよう学校全体で様々なプログラムを実施されておられた。アメリカの先生方に負けぬよう、私自身今後も授業力を磨いていきたい。

第7学年 異文化理解 “Let’s create an original 4-koma manga !”

教育学研究科 教職開発専攻 教育実践開発コース 畠山 絢

1 ねらい

本単元のねらいは、4 コマ漫画を紹介することを通して、日本で一般的な起承転結の物語構造を理解し、独自の4 コマ漫画をつくることである。

2 概要

- (1) 日本のマンガについて知っているものをあげてもらい、日本のマンガを紹介する。
- (2) 日本の4 コマ漫画を紹介し、一般的な起承転結の物語構造を説明し、バラバラにした4 コマ漫画を物語になるように考え、並び替えさせる。
- (3) 学んだことをもとに生徒オリジナルの4 コマ漫画をつくり、発表する。

3 成果と課題

(1) 成果

導入部分で日本のマンガを紹介した際、生徒と対話的に授業を進めることができた。4 コマ漫画を並び替えさせるとき、用意したバラバラのマンガがあったことで、手元で操作することができ、学習課題に取り掛かりやすくなったと考えられる。最終的に想定した独自の4 コマ漫画を作成することができ、発表まで生徒が作った4 コマ漫画を満足そうに語っている姿を見て取ることができた。

(2) 課題

4 コマ漫画を一度自力で並び替えさせ、起承転結の物語構造を説明した後に再度並び替えさせる時間をとったが、あまり並び替えに変容がみられなかったことから物語の構造に理解できたか疑問が残る。また、オリジナルの4 コマ漫画を実際に描く時に、いざ描くとなると生徒はどう取り掛かれればいいか戸惑うことが想定できていたはずであったが、その際の手立てが準備不足であった。担当の先生の助けにより、何とか乗り切ることができた授業であった。担当の先生の機転により、○と△で2人の登場人物を表して描き始めなさい等の指示を与えることにより、生徒にとって取り掛かりやすくなったと思われる。生徒の気持ちになって、段階ごとにスモールステップで授業を設計していくことの重要性を実感した。生徒の創造性を上手く引き出していくための場面設定などの準備や生徒が主体的に取り掛かるための工夫を惜しまずに考えることを忘れてはならないと感じた。

【自己の変容】

私がアメリカの中学校で学んだことは、以下の2点である。

一つ目に、授業準備とあらゆる場面の想定的重要性である。準備したこと以上のものではないので、うまくいかなかった場合の想定も含め、あらゆる場面を想定することの必要性を感じた。子供たちの創造性を活かそうとすることと、生徒任せにするのは違い、教師の想定が甘いと多様な生徒と一緒に授業を進めることはできない。生徒の気持ちになって、取り組みやすいように一つ一つ段階を設け、準備と次のステップにつなげるための工夫を凝らすことを考え続けていきたいと思った。

二つ目に、コミュニケーションの方法である。生徒の興味や実態もよく分からない中で、母語のサポートもなく、どう伝えるかということに苦戦した。日本で授業をするときよりも、伝えたいことを子どもたちの目を見てしっかり伝えることで、素直に反応が返ってくることが嬉しい反面、思い通りに伝わっていないのではないかという不安やなかなか思った通りに授業が進まないもどかしさを一層感じた。言語だけでなく、スライドの図等の視覚で、手元の操作等あらゆる手段を利用し、分かりやすく伝える工夫を試行錯誤しながら、伝えていく努力をし続けていくことの重要性を一層実感することができた。

第8学年 異文化理解 “Let’s create the ‘History Karuta’”

教育学研究科 教職開発専攻 教育実践開発コース 高木 勝海

1 ねらい

異文化理解の一助として「かるた」を取り上げた単元を設定し、日本の文化に触れてもらうとともに、歴史学習の手段の1つとして、「かるた」で楽しみながら学ぶという方法を知ってもらうことをねらいとしました。

2 概要

- (1) かるたの遊び方では、アメリカのことわざのかるたを例にしながら、読み手と取り手がいること、読み手の読んだ内容に対応した取り札を取るというルールを確認しました。
- (2) かるたを作成するための要素では、読み札と取り札を作成するときの構成要素について説明を行いました。
- (3) 実際にかるたで遊ぶ際のルールでは、かるたをどの程度の規模で遊ぶかについて提示しました。規模については複数のパターンを用意しておき、授業の残り時間によって使い分けられるようスライドを準備しました。

3 成果と課題

まず、成果についてです。本授業では、かるたに興味を持ってもらうことと、かるたで遊ぶことを通して、歴史的事象について学習する方法の1つについて知ることを目標としていました。授業では、実際にかるたで遊ぶ際に、学級の生徒の多くが積極的に参加し、かるたの枚数が少なくなるにつれて、熱中する生徒の姿が見て取れました。その様子から、かるたに興味を持ってもらうという目標に関しては達成できたと考えます。

次に課題についてです。今回はかるたの題材に、アメリカの歴史的事象を用いるように設定しましたが、英語による細かな指示を行うことができなかつたため、活動内容に戸惑う生徒が何人も見られました。それに付随して、机間指導を行う際、作業を行っている生徒に対する声かけのフレーズが出てこず、生徒と積極的に関わることができませんでした。これらのことから、自分自身の語彙力はもちろん、日本においてもアメリカにおいても、机間指導時の声かけの重要性を再認識することができました。

【自己の変容】

今回が初めての海外渡航ということもあり、プログラムが始まる直前までは不安の方が大きかったです。しかし、普段からともに生活している同僚や、新たに出会った方々と一緒に頑張ってきましたし、現地でも拙い英語を話す自分に対して、親身になって話を聞いてくださった方が多くいました。この経験から、挑戦することにためらわず、積極的に関わっていかうとする姿勢が大切だということに気づくことができました。

また、英語を話す中で、これまでは英語の必要性をそこまで感じていませんでしたが、互いの思いを伝えるためには、ある程度の語彙力を身につけておくべきだと感じました。

今回の実地研究は10日間という短い期間ではありましたが、そこに至るまでに、多くの先生方や同僚の方々、現地の方々にお世話になりながらやり遂げることができました。まずは、この実地研究に関わってくださった全ての方々に感謝を申し上げたいと思います。



授業風景

第8学年 異文化理解 “Let’s introduce our school!”

教育学研究科 教職開発専攻 宗本 千鶴

1 ねらい

- 1.日本の学校に対して興味・関心を高める。
- 2.日本とアメリカの学校の共通点や相違点を知る。
- 3.自分の学校の良さに気づく。

2 概要

- (1) パワーポイントで日本の中学校の1日を説明する。
- (2) 日本の生徒が作成した学校クイズに答える。
- (3) アメリカの生徒が学校クイズや学校紹介の掲示物を作成する。

3 成果と課題

成果としては3点ある。1点目は、日本の学校について知り興味を持ってもらえたことである。直接行くことができなくても、日本の学校を写真や動画で紹介することで、生徒は意欲的に話を聞いていた。担任からも他の先生にも見せたいのでデータが欲しいと頼まれ、日本の学校について生徒と教員の興味・関心を高められたことは大きな成果であるといえる。また、生徒が積極的にクイズに参加し、意欲的に反応していたのは、「学校」という生徒達に身近なテーマであったからこそ、共通点や相違点がよく分かり、関心や驚きを持って取り組めたと考える。

2点目は、日本の学校を通して、自分の学校について考える機会を作ることができたことである。異文化交流の良さを生かしつつ、それだけで終わらず、学校クイズを考えたりや紹介文を書くことを通して、自分の学校の特徴を意識的に見直し、良さに気づくことができたのではないかと考える。

3点目は、教材準備を細かく行ったことで、スムーズに授業が流れたことである。具体的には、クイズで答えを出すのが難しい時に備え、生徒が答えやすいよう三択問題を準備していたことや、日本の中学生にクイズを作り、学校紹介文を書いてもらっていたことである。作成モデルがあることで、アメリカの生徒たちが何を作ればいいのか理解でき、スムーズに活動に入ることができた。教材準備に時間はかかったが、授業をスムーズに行っていくために授業準備は綿密に行わなければならないと改めて実感した。

課題としては2点ある。1点目は、活動が早く終わった生徒への対応が不十分であったことである。クイズ作成グループと模造紙作成グループに分かれて活動を行ったが、クイズ作成グループが早く出来上がり時間をもて余すようになった。海外の学校を紹介した日本の教科書を印刷したものを配って読ませたり、他グループの作成に協力させたり、次の活動の指示を出すべきであった。

2点目は、機器トラブルがあり、その間生徒を待たせてしまった点である。前日に授業をする教室で機材点検の時間が確保できなかったことが大きかった。現地校の都合もあるため、難しい面もあると思うが、機材トラブルが起きないように前日に点検できると良かった。しかし、今回は授業前の休憩時間に担任と時間配分やトラブル時の対応について打ち合わせをしていたことで、トラブルはあったものの、冷静に対処できた点は良かったといえる。

【自己の変容】

生徒が積極的に授業に参加し、担任がトラブル時にサポートをしてくれ、多くの人に助けられ授業をすることができていると気づかされた。また、自分自身の英語力の低さも痛感したので、英語に触れる時間をできるだけ作りだし語学力を鍛えていきたい。この貴重な経験を今後も活かし、積極的に学び続ける教員でありたい。

① コミュニケーション観の変容

コミュニケーションに関係して、ある大学院生は、語学力が重要であることを認識している。一方、別の大学院生は語学力がそのままコミュニケーション力ではないことを認識している。また、非言語コミュニケーションや伝え合いたいという気持ちの重要性についての言及も見られた。

いずれにしてもコミュニケーションにおいて言葉のもつ意味を捉えなおしたり、その重要性や限界を感じたりしたことが記されている。参加大学院生の語学力には差があるが、この授業科目はいわゆる語学研修ではないため、授業実践というリアルな営みにおいて、それぞれが自分自身のコミュニケーションを見つめなおし、コミュニケーション観が変容しているといえる。

② 授業観の変容

よい授業とはどのようなときに実現するであろうか。綿密に計画され周到に準備された授業は、よい授業になるかもしれない。しかし、そのような授業もやり方によっては、学習者の主体性を引き下げるリスクがある。海外で、初めて出会う子供たちに、母語でない言葉で、1 単位時間の授業をするのはなかなか大変なことである。何か月も準備をした授業であっても、簡単に進めることはできない。そのような体験を通して、それぞれが自らの授業観を捉えなおす記述が見られた。

学習者である児童生徒の存在の意味やその多様性、児童理解・生徒理解の意味や重要性、授業過程における様々な想定的重要性、想定外のことにも対応する柔軟性などが実感されており、授業の本質的な捉えの強化や変容を確認することができる。また、現職教員でもある参加大学院生の記述には、授業力の一層の向上に向けて自己研鑽をしていきたいという意欲が示されていた。

③ 文化観の変容

米国ノースカロライナの文化については、渡米前は多くの参加大学院生が異文化として日本との違いに意識を向けていた。ただ、訪問中はあらゆる場面で違いに直面することで、自文化である日本の状況について、その理解が深まったり新たな問いが発見されたりしている。また、自文化の相対化にもつながっている。

一方、文化などについての違いを感じつつも、共通な点を見出した記述なども見られる。子供の発達段階、興味・関心や好奇心の状況、教師の思いや悩み、人々の思いやりや親切心などである。様々なことが異なる中での共通点は、双方にとつ

て強く共感できる場所であり、それぞれの安心や勇気につながることを確認することができた。

④ 変容の意味と展望

上記のような変容は、必ずしも特別なことではない。日本国内において、その重要性や意味を短時間で端的に示すことは可能である。しかし、そのような理解との違いは、それらについて聞いたり読んだりして知るのではなく、自らが身をもって実感するということである。それが、直接自己の変容につながったり、将来の自己の変容の種となる経験になったりするのである。

参加大学院生自身の経済的な負担や時間的な制約も大きい中で実施される「体験型海外教育実地研究」であるが、教員養成や教育研修の過程において大きな役割を果たしていると考える。

5 おわりに

以上のような記録と考察の通り、今年で第 11 回目を数えた体験型海外教育実地研究も無事、終了し、アメリカでの教育実践を通じた国際交流において大きな成果を挙げることができたと言えよう。特に今年は教科教育専攻と教職大学院の院生が参加し、授業や行事参加のために事前学習や教材検討のための会合にもなかなか全員がそろえることが難しいことが多かった。そのような中で、時間をやりくりしながら、参加教員および大学院生は短い時間の中で授業構想から指導案作成・検討を含む事前研修会をはじめ、現地教員を招聘してのワークショップ、本実習、事後指導、報告書の執筆など集中的なコースワークに取り組んだ。さらに、英語による教育実習という慣れない活動を終え、大きな自信と感動を得たことであろう。最後に、今年度の海外教育実地研究を振り返り、来年度への研修につなげるため、今後に向けた評価と課題について述べたい。

第一に、今回の参加者たちはそれぞれ多様なテーマに果敢に取り組んだことが評価できる。これまでの傾向として、日米の比較文化や、現地の生徒との交流や共同作業を取り入れた授業が増えていたが、今年は主として日本的な伝統・文化、特色ある事象を紹介するものが多かったように思われる。日本人にとっては日常生活の一部で当然と受け取っている物や事象をまったく目や耳にしたことがない相手に対して、懸命に説明しようとしたことはまさに真のコミュニケーション活動と言えるであろう。

第二に、授業づくりについて多くの気づきが認

められたことは大きな成果と考えられる。授業内容の準備やデザインだけでなく、それをどのように伝えるのか、生徒の主体的な活動につなげるか、生徒との対話にまで高めるか、などは、どのような教育環境であれ重要な課題である。すでに学部時代に一定期間の教育実習体験を持っているとは言え、異なる授業環境にどのように適応していくか、成功した事例とともに、思い通りに行かなかった経験からも学ぶことが多いであろう。

最後に、来年度に向けて努力を要する課題について少しふれたい。まず、アメリカ合衆国に対する諸事情の知識・理解を表層的な理解から深層的な理解へと深めていく必要がある。これは日本文化・事情についても同じことである。各院生はそれぞれ専門分野を持つため、その研究領域については豊かな知識を持っているが、メディアなどを通した一般常識的な理解に留まらず、現地の人々からの視点で理解しようとする必要がある。たとえば、“Sumo is Japan’s national sport.”という表現は、日本の相撲を全く見たことのない人にとって、そのイメージを理解することは難しいであろう。自分が説明しようとしている事物について相手がどこまで理解しているのか、それを過不足なく伝えるためには、より深い理解が必要になる。

続いて、授業方法についても工夫が必要であろう。参加者はそれぞれの研究分野、教科領域に関しては相当の理解をもっており、英語においても授業を行うのに十分な内容言語を有している。しかし、授業活動の中での的確に活動を指示すること、一定時間の中で何をどのようにすることをねらうのか、は意外な盲点になっているようである。たとえば、日本の教室においてハンドアウトを配る際に、もらった生徒はそれをどのように扱うのかは一つの教室文化として暗黙の了解がある。現地の生徒たちや教師に何をしてほしいのか明確に指示しないままに資料を渡すだけの作業は、お互いを当惑させることになる。

また、短い体験であるが、その機会をより十分に活用してもらいたい。私たちは自ら慣れ親しんだ日本の教育というフィルターを通して理解してしまう可能性もあり、その定常性にどのように挑戦できるかが課題であろう。どんな小さな気づきであっても、現地の学校関係者に積極的に尋ねる意欲がほしい。あとで情報検索を行うことはできるが、現地の人々のことばを通して得られた理解は、より深く残るであろう。

以上のような課題と自らの発見を、ぜひ来年度の参加者にしっかりと伝えてほしい。終わりに、今回の体験型の成功は、参加者による自己研鑽の努力があつてこそ実現できたものであるが、その背景には、前代表の小原友行先生（福山大学）や現地の人々の献身的な交流や努力による支援があつたことに感謝したい。

〔参考文献〕

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp.43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp.39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, p.155-168。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第

20 卷, 2014, pp.161-181。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第 21 卷, 2015, pp.143-161。

深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅸ」, 広島大

学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第 22 卷, 2016, pp.251-268。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅹ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第 23 卷, 2017, pp.103-116。